あらえびす賞

# 情景を造る、造り出す

盛岡市立土淵中学校　1年　北村　花絵

私は、音楽の授業でシューベルトに出会いました。私がシューベルトに興味をもったのは、その授業がきっかけです。「楽興の時・第三番」はかなり名高いですが、私は、「第二番」の方に興味を持ち、この曲を選びました。

この曲は、八分の六拍子の穏やかな曲です。私は、最初の方に流れてくる絶妙な間と静かなピアノの音が好きです。曲が進むにつれ、物語は壮大になっていくと私は感じました。ピアノの軽やかさと落ちついたリズムが、私の心の中に広い草原を造り上げていきました。同じリズムから違うリズム、音高が高くなるにつれて、美しい青空が見え始め、温かく心地よい風が流れてくるようでした。軽く静かで徐々に明るくなっていくこの曲の前半部分の音を聞いていたら、新たに感じたことがありました。この広い草原を思い浮かべさせるような様々な音の中に、少し切なさを感じたのです。この切なさはどこから来ているのか。それはきっと、高いピアノの音に隠れている低音の伴奏でできている背景が奏でているものだと私は思いました。

ゆっくりと、そして静かにこの曲が幕を閉じる…かと思いきや中盤が、始まります。情熱的な曲想に変化しています。この、いきなりやってくる激情的な部分が、私はおもしろいと思います。先ほどまでは青空の下に広がっていた草原が、私の心の中で変化したからです。嵐がやってきて、曇り空がみるみる広がっていくようでした。ですが、その嵐は自然の移り変わりを精いっぱい表現しているように感じました。なぜか、その嵐は不快にならない、いやむしろ心が洗い流されていくような気持ちを覚えました。中盤の曲想の変化は、聞き手にとってとても印象強く残る場面だと思います。シューベルトの作曲の仕方は聞き手を飽きさせない、工夫をして作っているのでしょうか。聞き手の発見や驚きがこの曲にはつまっています。このことも、私がこの曲を好きな理由です。

終盤にさしかかると、再び最初の聞き覚えのあるせんりつが戻ってきます。少しためらいがちに、静かに、そして軽やかにピアノは音を奏でます。雨が

止み、光が差し込んできた様子が浮かびます。のんびりと時間が過ぎてゆく、この音楽が造り上げてくれた情景と温度、時間が好きです。想像を広げて、世界を広げてくれるこの音楽が私は好きです。

この曲を聞いて、私は自然の風景が思い浮かびました。シューベルトはどんな情景を想像したんだろう。私以外の人はこの曲を聞いて何を考え、感じ、想像力を広げたのだろう。そう考えると、私はわくわくしてきます。優しい音色に包まれたこの音楽は、音だけでなく、聞き手の想像力がプラスされることによって成り立つのではないかと考えました。

落ちついたメロディーを何度も聞いて、私はもう一つの情景を思い浮かべました。それは、感情の情景です。最初は穏やかで静かな気持ち、少し切なさを見せていて、中盤は悲しそうな気持ち、終盤は温かくて優しい気持ち、という具合です。

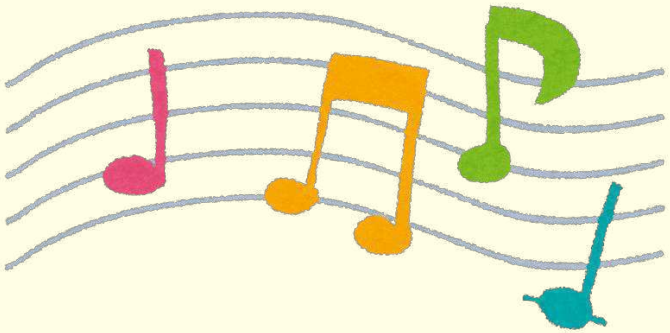
曲には、そのストーリーがあると思います。でも、歌詞がない場合は音、リズム、テンポなどから読みとらなくてはいけません。そこで、想像力というものを使って、個人個人の解釈をすれば良いのです。この曲にも、そんな自由さがあると思います。

私がこの曲に魅せられた一番の理由は、心の中に描いた情景があまりにも壮大で美しかったことです。もっと聞きたい、聞いていたい、という衝動にかられました。曲が始まってから終わるまで、すべての音とリズムにシューベルトの工夫がちりばめられているせいで、私はこの曲に魅せられ、感動したのです。

音楽はストーリーです。想像力を使って、心の中に鮮明な情景を造り出すこともできます。音の一つ一つのメッセージから、場面の移り変わりの様子、温度や感情など、様々な読み取りが可能です。この曲の良さ、音楽の良さは、まさにこのことなのではないでしょうか。

このように、「楽興の時・第二番」は私の心に新たな世界を広げ、造り出した素晴らしい曲なのです。

曲名　楽興の時　第二番
作曲　シューベルト



## 審査員講評

あらえびす賞感想文について

シューベルトの音楽から風景を想像し、時間の流れや、感情の変化まで感じ取っている北村さんの感性あふれる感想文に、感心しました。

形式的な音楽ではなく、喜び、悲しみなど自分の思いを音符に表していったシューベルトの音楽には、心に訴えかけるものがあります。２００年も前に作曲された曲とは思えないほど、現代の私達にも、優しく寄り添ってくれる音楽。それが、シューベルトの音楽なのかもしれませんね。

教育長賞

# 「こうもり」が教えてくれたこと

紫波第一中学校　2年　岡崎　芽生

題名「こうもり」私は勝手に暗いイメージを持っていました。ところが、実際聞いてみると、とても明るく楽しい曲だったので、とても驚きました。私はこの曲に興味がわき、調べてみると、ヨーロッパでとても有名なオペレッタだということがわかりました。

曲の冒頭は、まるでこうもりがひらひらと飛んでいるような、軽やかで美しいメロディーから始まりました。やがてメロディーが変化していきながら、曲が奏でられていきます。この曲は、明るく元気な曲になっています。私は特にこの曲のつい踊りだしたくなるようなワルツの曲調が気に入っています。私はこの曲を初めて聞いてから、元気を出したいときや気分を上げたいときによく聞いています。

そして、曲の終盤で、音のボリュームを抑えてから、だんだんと大きくしていき、テンポを曲に壮大感が生まれ、聞くと満足感があります。

オペレッタのこうもりは、第二幕で、舞踏会の場面になります。その場面では、登場人物であるアイゼンシュタインとロザリンデの会話がとても面白いポイントです。そして、この曲のワルツの曲調が、その舞踏会の場面ととても合っていて、自分も舞踏会に参加しているような気分になります。わずか十分足らずの短い曲にもかかわらず、聞く人の心をぐっとつかむ曲は、とても素晴らしいと思いました。その他にも、このオペレッタは先ほどの二人の人物を取り巻く登場人物がコミカルに描かれていて、その登場人物一人ひとりに物語があり、面白いです。

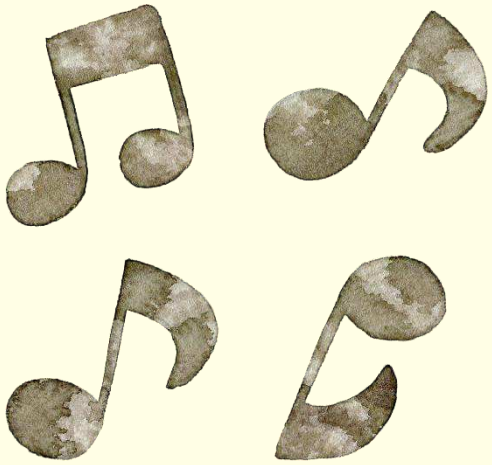
そして、私はこの曲のお陰で、クラシックの良さに気づきました。この曲に出会うまで、私はクラシックは聞いて満足していました。けれど、今回のように、曲がつくられた時代や、物語について深く迫ってみると、初めて聞いたときより、より違った視点で楽しめることを知ったのです。クラシックに限らず、歌詞のない音楽は、どうしても、作者の伝えたいことが一回聞くだけでは分からないことがあります。しかし、この曲を通して曲について深

く迫ることの大切さに気付いてからは、気になった曲は少しでも作曲者の意図を知ろうと、曲を作ったときの出来事や時代背景などを調べています。

そして、調べてみて一番面白いと感じた曲が、「こうもりの序曲」でした。オペレッタということもあり、オペレッタこうもりを映像で見ると、二倍も三倍も面白く感じました。そして、わくわくさせる序曲は、この物語の面白さを予感させるような役割もはたしていると思いました。

私は、学校の係の仕事が忙しくて疲れているときや、対人関係の悩みがあるときはよく序曲を聞いています。オペレッタのこうもりは序曲だけでなく、場面ごとの音楽もとても素敵だということが今回わかりました。序曲は、場面ごとの主な音楽を短くダイジェストにしており、作品の冒頭部分で、聴き手をオペレッタの世界に誘ってくれると感じました。大人になったら、ヨーロッパの劇場で本物のオペレッタ「こうもり」を見てみたいです。

曲名　オペレッタ　こうもり　序曲
作曲　ヨハン・シュトラウスⅡ世



優秀賞

# 授業の思い出

紫波第二中学校　3年　阿部　樹里

皆さんも一度はどこかで耳にしたことがあるかもしれません。

「タンタタタタンタタタタンタン…」

静かに弾む小太鼓と踊りだしたくなるような三拍子のリズムが印象的なこの曲と出会ったのは、今年の一学期でした。音楽の授業で初めて「ボレロ」を鑑賞しました。

私の耳にまず初めに飛び込んできたのは小太鼓の音でした。軽やかにボールが跳ねているような一定のリズムを刻んでいます。曲全体を通して聞いてみると、小太鼓の弾んでいるリズムが中心となっていることに気づきました。

授業で小太鼓のリズムを実際に叩いてみました。一見簡単そうに見えましたが、実際にやってみると思ったより難しかったです。また、ほかの楽器の音を消さないようにバチの先で叩くことも意識してみました。

この曲は小太鼓だけでなく、フルートやクラリネット、トランペットなど、様々な楽器を使って演奏されています。小太鼓を引き継いだフルートとクラリネットが次々と演奏されます。私は鑑賞しているときに始めの一つの楽器での演奏と、最後の全ての楽器での演奏を比較して聞いてみました。最初に比べて厚みのある音になっていると感じました。曲が進むにつれて楽器が重なり、立体感のある曲になっていました。

二つの旋律が交互に現れ、曲全体が一つのクレシェンドになっているのも特徴の一つです。旋律Ａは十六分音符がたくさん使われています。全体的にのびのびとした、気持ちの良い旋律になっています。旋律Ｂは高低差が激しく、情緒豊かな旋律になっています。

この曲は旋律Ａを二回、旋律Ｂを二回の計四回を一セットとして四回繰り返されます。ただ繰り返すのではなく楽器が重なっていったり、組み合わせが変わっていったりします。その少しずつの変化を楽しみながら聞くと、ワクワクが止まらなくなりました。

また、音楽の授業ではバレエの映像とともに鑑賞しました。耳で聞くだけ

ではなく、目で見て鑑賞すると、一味違ったボレロに出会うことができました。耳で聞いたときは、おっとりゆったりとした豊かな曲想を感じました。しかし、目で見て鑑賞すると、険しい顔の男性が何人もいました。楽器が増えるのと同時に男性の人数も増えていき、最後には、全員で一人の男性を囲み、たたえあうように踊っていてとても驚きました。

さらに、ピアノ一台での演奏も鑑賞しました。ボレロというと、小太鼓の一定のリズムにたくさんの楽器が重なるイメージがありますが、ピアノだけでもオーケストラのような臨場感あふれる曲になっていました。オーケストラでもピアノでも一つのクレシェンドになっていることは変わりませんでしたが、ピアノのほうがオーケストラに比べて音が軽く感じました。楽器の数は違いますが、それぞれにあった良さが出ていました。

この曲はバレエのために作られた曲です。しかし、オーケストラの作品として演奏されたり、フィギアスケートでボレロを演じたりと様々な場面で使われています。

私は音楽の授業を通して、オーケストラやバレエ、ピアノの三つの観点から、ボレロのリズムや旋律の変化、曲想について感じ取ることができました。私にとってボレロとは、焦っているときや気持ちが乗らないときに聞くと心が穏やかになる曲です。例えば、テスト勉強が思うように進まないときに、ボレロを聞いて気持ちを切り替えて取り組むことができました。これからも、行き詰まったときはボレロを聞いて一つ一つ乗り越えていきたいです。

曲名　ボレロ
作曲　ラヴェル

優秀賞

# 魂のピアニスト　フジコ・ヘミング

紫波第二中学校　2年　佐藤　那智

二〇二三年四月二十三日、私はフジコ・ヘミングさんのソロピアノコンサートに行きました。

私は四才からピアノを習っています。今までに何度かプロのピアノ演奏を聞いた事はありましたが、フジコさんの奏でる音は別格でした。今、九十歳のフジコさんは、ステージ上のピアノに行くまで、手押し車を押し、男の人に付き添われながらピアノまで向かいました。私は「転ばないかな、イスに座るの大変じゃないかな。」と見守る様な気持ちで拍手をしました。観客が皆、フジコさんのピアノを聴くためにしんとなり、コンサートは始まりました。私は息を飲みました。信じられない程なめらかな指使い、一つも汚い音がしない聴いた事の無い透明な音色、私が抱いていた、フジコさんを見守る様な気持ちは一瞬で吹き飛んでいきました。そして、この日、私が一番楽しみにしていた曲はＦ・リストのラ・カンパネラでした。曲が始まると観客全員がこの曲を待っていた事が伝わってくるような会場の雰囲気でした。フジコさんが奏でる、ラ・カンパネラは、すごく優しくて、まるでフジコさんが私達に話しかけてくるような初めて感じる音色でした。私は、もっとフジコ・ヘミングという人間を知りたくなりました。こんなに素晴らしい音色を出せる人の人生はいったいどんな経験をして、どんな華やかな人生を送ってきたのかを知るために、フジコさんが書いた「希望の力　くじけない、あきらめない心」という本を読みました。

フジコさんは、ドイツのベルリンに生まれスウェーデン人画家の父親と、ピアニストの卵としてベルリンに留学していた母親とのハーフで、フジコさんが三才の時に家族で東京に来たそうです。フジコさんが五才の時に両親が離婚をし、戦後ピアノの家庭教師をしながらお母さんが一人でフジコさんと弟を育ててくれたそうです。フジコさんは四才でピアノをお母さんから習い始めました。一回二時間のレッスンが一日に二、三回も繰り返されるとても厳しいスパルタ式だったそうです。フジコさんの家はあまり裕福ではなく、

ハーフである事からいじめられる事もあったそうですが、フジコさんは「貧乏は恥ずかしいことではないの。でも貧乏に負けて夢や希望を失ったら、そのとき本当の貧乏人になるのよ。」や「人間は誰でも弱い。しかし、苦しくて逃げたら終わりよ。」とフジコさんは言っています。あの語りかける様な音色の原点はあきらめない事と、努力する事だとわかりました。私は、中学生になるまで伴奏をしたことがありませんでした。特に出番もなく何のためにピアノを続けているのか分からなくなっていました。ですが中学生になってから一年間に5曲も弾かせてもらえました。歌声に合わせて弾く事は楽しくてピアノを続けてきて本当に良かったと思いました。フジコさんも「努力していれば、チャンスはやって来る。だから、いつ来てもいいようにしておくことね。」と言っています。私はこの言葉が大好きです。

　フジコさんの人生はお金もなく外国ではひとりぼっちでつらい事も多く、華やかな世界とはかけ離れていました。しかし、フジコさんはあきらめない心を持っていて、チャンスをつかむため一生懸命生きていました。「チャンスは人を選ぶの。夢ばかり見ていて努力しない人には決してチャンスはやってこない。」とも言っています。ピアノの音色は、弾く人の性格が出るとよく聞きます。フジコさんは、多くの人をピアノの音で励ましたいと願っているようです。私も、フジコさんのように、ピアノの音で、励ましたり、応援したり、人の心に残る演奏をしてみたいです。

曲名　ラ・カンパネラ
作曲　Ｆ・リスト